

国連大学グローバルセミナー第二回島根・山口セッション 2006.08.05-08
テロリズム——地球規模の挑戦 Terrorism——A Global Challenge

Global Terrorism時代における「テロリスト」の誕生 ——Global Identity and Local Roots——

Group5. Fujimoto Tokihiko / Gao Yuan / Ishiguro Toshiyuki / Ishii Tomoko / Murasaw Chihiro / Nagasaki Shunsuke / Nakane Masahiro / Nakano Kurara / Shimizu Takeshi / Yagi Hitomi/

Key words : Global / Local / プロセス / 参加 / 過激化

はじめに

現代社会において「テロリズム」を考える際に二種類の捉え方がある。それはglobal terrorismとlocal

terrorismだ。まずlocal terrorismは、ゲリラ活動のように占領下の中で生きている人々や、毎日暴力下にある人々がそれらの抑圧、支配と戦うテロだ。かたやglobal terrorismは、自分たちは実際に攻撃を受けていないが、インターネットやメディアを通して遠くで起こっているテロに共感して起こすテロのことを言う。現在テロリストたちは対人的ネットワークがあるわけではなく、これらのメディアを通してglobal networkを築いている。

このセミナーを受講して今日のテロリズムはglobal terrorismであることに特徴があるということをお私達はまず確認した。global terrorism時代においては、個人がテロにアクセスできる。例えば、ビンラディンはインターネットや、説教のカセットテープなどを手に入れ、独自でイスラームの思想を高めていた。

そのような時代背景を踏まえた上で私たちは次のように問うた。

なぜ人はテロリストになるのか？

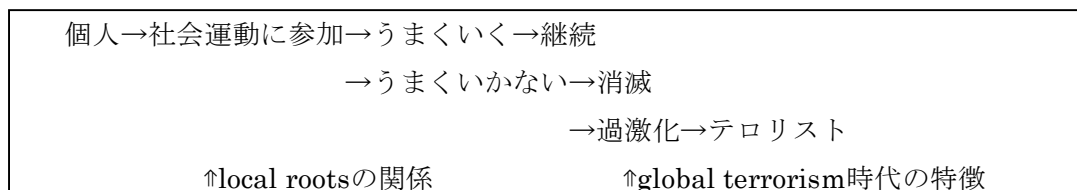
どのようにして人はテロリストになるのか？

テロリストは生まれながらにテロリストなのだろうか。以下において詳細に検討しているが、ビンラディンしかり、自爆テロ実行犯しかり、彼らはどこにでもいる青年だったのだ。では、テロリストは生まれながらではなく、成長していく過程で過激化し、テロリスト化していったのであろうか。彼らはどの時期に、何があって、過激化したのであろうか。

私たちはこれらのセミナーレクチャーやディスカッションを通して、個人がテロリストへと変化するプロセスを「参加」・「過激化」に着目し理論モデル化した。理論モデルを検討する事例として、私たちはglobal terrorismに関する事例としてビンラディンを指導者とするアル=カイダを、local terrorismに関する事例として解放のトラ、IRAを取り上げる。

1. 理論モデルの提案——個人のテロリスト化プロセスにおける「参加」と「過激化」

個人がテロリスト化するプロセスとして私たちは以下のモデルを提案したい。



個人が社会運動に参加する際には、local rootsが重要である。local rootsとは地縁・血縁関係・友人関係などの地域的な連帯がもとになり、参加が促されているということだ。個人が参加した社会運動がうまくいけば、運動は平和的に継続され過激化は起こらない。個人が参加した社会運動がうまくいかない場合、そのまま運動は縮小、消滅をたどるものと、過激化するものに分かれる。

global terrorism時代の運動の過激化について、宮坂先生はテロを継続させる原動力としてのイデオロギーに着目し、「伝播力を秘めたイデオロギーは、個々の組織が潰されたとしても、別の組織や人々の心には生き続ける。広く一般にも普及した信条、そして、それに基づいた社会運動の中から、ごく一部の過激なグループが生まれるものである」と指摘し、「テロリズムは社会運動の中から徐々に生まれる」ものであると続ける。

加えて、うまくいかない社会運動が過激化する理由については、宮坂先生の以下のパブリシティに関する指摘が参考になる。「国家や社会に衝撃を与えることを目標とするならば、前のテロを上回らなければな

らない。それを見てもらうために、パブリシティを共通の要素とするテロリズムが、非政治的な、純粋に破壊的なものに変質してもおかしくないであろう。」

さらに、人類学におけるコミュニティに関する研究が役にたつ。

人類学者のカリザス,Mによると、「想像の意識レベル (community意識、共通の思想)を持つ個人が、face to faceの関係を持つ。そのときにこの二つは、お互いに確認しあい、お互いに定着していく。つまり、フィードバックを通して、この二つはパッケージ化されcommunityが出来あがる」という。このコミュニティ形成に関するカリザスの理論は、上記global terrorism時代の特徴と合致している。

過激化した組織・個人が手段として暴力を行使したとき、過激化した組織・個人は「テロリスト」となる。

課題としては、この理論モデルは個人の主体的な参加を前提にモデルを組み立てているため、やむおえずなく、しょうがなく、まきこまれてという消極的参加はうまく盛り込むことができなかった。

2. Global terrorism

2.1. オサマ・ビンラディン

かつてのビンラディンは普通の青年であった。第四次中東戦争などをきっかけとして、中東社会が西欧化と石油ブームで混乱が起こった。西欧化の影響でイスラム教原理主義者などは大学やモスクに追いやられていた。しかし、1979年にイランでホメイニ氏の指導の下イスラム革命が実現し、イスラム教徒の間ではイスラム原理主義が再興する傾向が強まった。ビンラディンもこのとき原理主義へと傾倒していった。これらの動きが後のビンラディンの行動の萌芽となった。

また、この年アフガニスタンにソ連軍が侵攻し、世界各国のイスラム教徒が義勇兵としてアフガニスタン入りした。ビンラディンもアフガニスタンに入り、ムジャーヒディーンのリーダー、アブドラ氏の下でソ連軍と戦闘を行なった。その後彼はアフガニスタンに自分の基地を設けるが、この基地は後のテロリスト養成場となる。これ以降彼の活動は活動範囲も広がり過激化の一途をたどる。

1991年に湾岸戦争が勃発し、その後米軍がサウジアラビアに駐留するようになると、サウジアラビア王家との関係が悪化し、サウジアラビアから追放され、スーダンに移り住んだ。このとき世界各地のイスラム教原理主義に理解のある金融機関と関係を作りまた慈善団体を各地に作り、世界的な資金の運用を可能とした。この前後にテロ組織アルカイダが結成された。

その後、ビンラディンはソマリア内戦に介入していた米軍を撤退させることに成功し、米国と戦うことを決意する。1993年に彼はニューヨークの世界貿易センターに爆弾テロを実行し、このとき世界的にテロ組織アルカイダが認識された。彼がその後の同時多発テロを実行し世界に衝撃を与えたのは周知の通りである。

2.2. ザカリア・ムサウイ

9・11テロに関わり、実行犯の一人として自爆する予定であったザカリア・ムサウイは、1968年にモロッコからの移民の両親の間に、4人兄弟の末っ子としてフランスで誕生した。

中学卒業後、高校入学時に大学進学へつながる普通教育課程への進学を強く希望したが、教師に反対されて断念した。ここで移民に対するフランス人の差別やフランス社会からの疎外感を強く感じたと思われる。その後地元の職業高校を卒業し、技術者免状を取得したが、大学に固執していた彼は、1992年ロンドンに留学することを決め、翌1993年25歳のときにロンドンの大学に入学した。このときロンドン

イスラム過激派の拠点となっていた。ザカリアはここでイスラム過激派と出会ってモスクに通い始めたと考えられる。彼の周囲には過激派の指導者らがあり、更に共に過激化に嵌り込む仲間もいた。

2.3. モハメド・アタ

同じく9・11のテロに関わり、実行犯として自爆したエジプト人のモハメド・アタについて述べたい。

彼は1968年、非ムスリムの両親の元に生まれた。母親の実家が裕福な上に父親は弁護士だったので、家庭は裕福であった。21歳でカイロ大学を優秀な成績で卒業したが就職がなかった為、23歳の時にドイツのハンブルグ工科大学へ留学している。この時、ドイツでアラブ人に対する差別により劣等感を感じてからは熱心なムスリムとなった。更に27歳の時にカイロ及びサウジアラビアを訪れ、エジプト社会の貧困を目の辺りにして過激化したものと考えられる。ドイツに戻ってからモスクを通じてアルカイダに参加し、結果として9・11テロの世界貿易センタービル北棟に突っ込むグループのリーダーとなった。

3. Local terrorism

3.1. 解放のトラ

また少年兵の例としてスリランカの「開放のトラ」があり多くの少年兵が所属している。開放のトラの現状としては全兵士の75%が少年兵であると言う数字もあり懸念されている。1999年にはスリランカ北部のアンパカマンでの政府軍との戦いで540人の解放のトラの兵士が死亡したがこの中の49人は11歳から15歳の子供であった事件も存在したのだ。子供達が兵士になっていく過程を見ると誘拐された後、武器の訓練を集中的に受けさせられ少年兵とされるのである。

3.2. IRA

IRAに関わりを持った青年は、小学生の時に歴史に興味を持ち、中学生になってからは歴史・政治に対し興味を深めた。そのことが彼をアイルランド共和党のデモに参加させるきっかけになった。さらに共和主義者として活動するうちに政治的要求が大きくなり、過激化したと考えられる。

4. 結論——Global Identity and Local Roots

・理論モデルの妥当性

→テロリストは生まれつきテロリストなのではなく、運動への参加、過激化のプロセスを経て、テロリストへと変化していく。

→解放のトラやIRAに関しては、参加の時点での主体性はなかったが、運動にまきこまれていくなかで過激化せざるをえなかったのではないだろうか。

・なぜ人はテロリストになるのか？

→localなつながり(友人、家族など)をもとにしたテロへの参加

→globalなつながり(インターネット、人の国際的移動など)を通じてのテロへのアクセス

→安全、アイデンティティの否定

→抑圧、支配への抵抗

参考文献

フセイン・イラク政権の支配構造、酒井啓子著、岩波書店、2003

イラクはどこに行くのか、酒井啓子著、岩波ブックレットN0643、2005

国際テロネットワークーアルカイダに狙われた東南アジアー、竹田いさみ著、講談社現代新書、2006

テロリズム a very short introduction TERRORISM ,Charles Townshend,宮坂直史訳、岩波書店、2004

ビンラディンとアルカイダ ～極秘資料が暴くイスラム過激派の実像～、ロラン・ジャカール著 前沢敬訳、
双葉社、2002

Why human have culture - Explaining anthropology and social diversity, Michael Carrithers, Oxford
Press, 1992

正体 オサマビンラディンの半生と聖戦、保坂修二著、朝日新聞社、2001

ビンラディン アメリカに宣戦布告した男、ヨゼフ・ボダンスキー著、鈴木主税訳、朝日新聞社、2001

オサマビンラディン、エレン・ランドー著 松本利秋監修、大野悟訳、株式会社 竹書房、2001

自爆攻撃 私を襲った32の榴弾、広瀬公巳著、日本放送出版協会、2001

The psychology of TERRORISM, John Horgan, Routledge, 2005